2024年度

入 学 試 験 問 題
（A 日 程 午 前）

国　　語

注　意

1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
2 「開始」の合図で，1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
3 **解答用紙に受験番号**を書きなさい。名前を書いてはいけません。
4 答えはすべて**解答用紙の指定された解答らん**に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
6 「終了（しゅうりょう）」の合図で，すぐに筆記用具を置きなさい。
7 問題および解答用紙は机の上に置き，持ち帰ってはいけません。

雲雀丘学園中学校

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

うちの庭には木が多すぎるのではないか、木と木の間隔が狭すぎるのではないか、という相談をよく受ける。人々は、間隔が狭いと光と水の奪い合いになる、と心配するようだ。しかも、林業に詳しい人ほど不安がる。植林地では、1ミキをできるだけ早く伐採可能な太さにしなければならないので、大きな*樹冠が均等に広がるように充分な間隔を確保する。そのために、①五年ごとに邪魔になる木を切り倒すほどだ。

切られなかった木は一〇〇歳という若さで製材所送りになるので、少しぐらい不健康でもかまわない。不健康？　邪魔者がいなくて、たくさんの光を2アびて、水も充分に吸収できる木ほど、すくすくと元気に育つはずだ、不健康なはずがない。あなたもそう思っただろうか？　さまざまな種類の樹木が生える森では、たしかにそのとおりだ。それぞれの木が少しでも多くの光や水を得ようと競争する。

しかし、同じ種類の樹木同士ではそうはならない。すでに紹介したように、ブナなどの木は仲間意識が強く、栄養を分け合う。弱った仲間を見捨てない。仲間がいなくなると、木と木のあいだに隙間ができ、森にとって好ましい薄暗さや湿度の高さを保てなくなってしまうからだ。つまり、局所的な気候が変わってしまう。最適な気候が維持できてはじめて、それぞれの木は自分のことを考え、自由に生長できるようになる。そうはいっても、完全に自由なわけではない。少なくともブナの木は〝公平さ〟に重きを置いている。

私が管理しているブナ林で、ある学生が3キョウミ深い発見をした。信じられないことに、そこにある木はどれも②まるで申し合わせたかのように同じ量の光合成をしていた。どの木もそれぞれ違う環境に立っていて、土が柔らかい場所もあれば、石が多い場所もある。湿っぽい区画もあれば、乾燥しがちな土壌もある。栄養素がどれぐらい含まれているかも区画によってまちまちで、それこそ数メートルごとに環境が異なっている。条件が違うのだから、内部で合成される糖分の量もばらばらで、生長の早さもそれぞれ異なっている。③それなのにどの木も同じだけの光合成をしているのはなぜだろう？

私はこう考える。太い木も細い木も仲間全員が葉一枚ごとにだいたい同じ量の糖分を光合成でつくりだせるように、木々は互いに補い合っている、と。この調節は地中の根を通じて行なわれているのだろう。根を使って、私たちが想像する以上の情報が交換されているにちがいない。豊かなものは貧しいものに分け与え、貧しいものはそれを遠慮なくちょうだいする。ここでも、菌類の巨大なネットワークが活躍し、出力調整機のような役割を果たしている。あるいはまた、立場の弱いものも社会に参加できるようにする社会福祉システム、といえるかもしれない。

ブナの場合、木と木の間隔が近すぎると生長できない、などということはない。逆に一メートルの範囲内に何本かが並んでいることもある。その場合、間隔が狭いので樹冠も小さくなる。その状態をよくないと考える林業従事者もたくさんいて、彼らは間隔をもっと空けるためにそのうちの一本を切り倒したりする。

［X］あるとき、*リューベックの専門家が、④密集しているブナ林のほうが生産性が高いことに気づいた。4シゲン（主に木材）量の年間増加率が、密集林のほうが明らかに高いのだ。つまり、密集しているほうが木が健康に育つ。養分や水分をよりうまく分配できるからかどの木もしっかりと生長してくれる。

窮屈そうだと思って、人間が手助けのつもりで〝邪魔者〟を取り除くと、残された木は孤独になり、お隣さんとの交流が途絶えてしまう。［Y］、隣には切り5カブしか残らないのだから。すると一本一本が自分勝手に生長し、生産性にもばらつきがでてくる。一部の樹木だけがどんどん光合成をして、糖分を蓄える。そういう木は健康でよく生長するが、長生きすることはない。なぜなら、一本の木の寿命はそれが立つ森の状態に左右されるからだ。

連携を失った森にはたくさんの〝敗者〟が立ち並ぶことになる。養分の少ない土壌に立っている木。一時的に病気になってしまう木。遺伝的に欠陥のある木。そういったメンバーが、強いものから助けてもらえずに衰弱し、害虫や菌類の攻撃を受けやすくなってしまう。強者だけが生き延びるのは、進化の6カテイにおいて当然のことだと考える人がいるかもしれないが、樹木の場合はそうではない。

樹木自身の幸せは、*コミュニティの幸せと直接的に結びついている。弱者がいなくなれば、強者の繁栄もありえない。木々がまばらになると、森に日光と風が直接入り込み、湿った冷たい空気が失われる。その状態が続くと、強い木も病弱になり、まわりの木のサポートに頼らざるをえなくなる。そんなときにまわりに木がなければ、どんな巨木でも害虫がついただけで死んでしまう。

私自身、⑤この助け合いを体験したことがある。林業を始めて間もないころ、私は若いブナの木に〝環状剥皮〟を施した。地上一メートルのところでミキのまわりの樹皮をぐるりとはがすのだ。そうすると木は枯れてしまう。これは間伐法の一つで、木を切るかわりに枯れさせて、枯死木として森に残すのだ。枯死木は葉を失うので、倒さなくても隣にある生きた木のスペースが増える、という算段だ。皮をはがれた木が死ぬまでには数年かかる。残酷な話だと思っただろうか？　私もそう思う。だから、もう二度とするつもりはない。

樹皮をはがれたブナたちは必死に生きようとした。それどころか、現在まで枯れずに生きつづけた木もある。⑥想像もできなかったことだ。樹皮がなければ葉でつくられた糖分が根に届かないからだ。本来なら、根に糖分が届かなくなった木は飢え死にし、水を吸い上げるのをやめ、枝葉に水分がなくなり枯れてしまうはずだ。それなのに、剝皮のあとも多少なりとも生長を続けた木がたくさんあった。

今の私にはその理由がわかる。まわりの木の援助によって生きつづけることができたのだ。地中のネットワークを通じて、栄養を分け合っていたのだろう。はがれた皮を再生することに成功した木も少なからずあった。

私は今では、⑦自分がしたことの愚かさを恥ずかしく思っている。この出来事を通じて、木のコミュニティの団結力がいかに強いかを学ぶことができた。〝社会の真の価値は、そのなかのもっとも弱いメンバーをいかに守るかによって決まる〟という、職人たちが好んで口にする言葉は、樹木が思いついたのかもしれない。森の木々はそのことを理解し、無条件に互いを助け合っている。

（ペーター・ヴォールレーベン著　長谷川圭訳『樹木たちの知られざる生活　森林管理官が聴いた森の声』）

*樹冠……葉が集まって光合成をおこなっている樹木の上部部分。
*リューベック……ドイツ北部の都市。低地に天然のブナ林が生息しており、世界遺産となっている。
*コミュニティ……共同体。

問一 ═線部1～6のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ──線部①「五年ごとに邪魔になる木を切り倒す」とありますが、森で木を切り倒した時に起こる変化について次のようにまとめました。[A]・[B]にあてはまることばを本文から探し、それぞれ指定した字数で書きぬきなさい。（　、　。「　」は字数に数えます。）

さまざまな種類の樹木でできた森	同じ種類の樹木でできた森
たくさんの木々があると、 互いを邪魔者として意識する。 ↓ 光や水を求めて競争する。 ↓ **木を切ると** 最適な気候になる。 ↓ **結果** 元気に育つ。	たくさんの木々があると、 互いを [A　二字] として意識する。 ↓ 光や水を分け合う。 ↓ **木を切ると** 隙間ができて [B　十四字]。 ↓ **結果** 自由に生長できなくなる。

問三 ──線部②「まるで申し合わせたかのように」を言いかえた表現として最も適当なものを次の**ア～エ**から選び、記号で答えなさい。

ア まるで約束したかのように　**イ** まるで教えられたかのように
ウ まるで強要したかのように　**エ** まるで待っていたかのように

問四 ──線部③「それなのにどの木も同じだけの光合成をしているのはなぜだろう?」とありますが、筆者はなぜだと考えていますか。次の文の[C]・[D]にあてはまることばを本文からそれぞれ二字で探し、書きぬきなさい。

> 育つ条件が異なる木々の栄養が同じ量になるように、地中の根や菌を通じて[C]をやりとりし、養分を[D]しているから。

問五 本文中の[X]・[Y]にあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを次の**ア～エ**から選び、記号で答えなさい。

ア X すると　Y あいにく　**イ** X ところが　Y なにしろ
ウ X また　Y たしかに　**エ** X ところで　Y おそらく

問六 ──線部④「密集しているブナ林のほうが生産性が高い」とありますが、それはなぜですか。あてはまらないものを次の**ア～エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 害虫や菌類の攻撃にあったとき、そばにいる木々が支えてくれるため、長生きするから。
イ 木がたくさんあることで、森に直接日光と風が入らず冷気が保たれるため、長生きするから。
ウ 木が集まると、たくさんの葉で光合成をして養分が多い土壌となるため、長生きするから。
エ 木々が密集した場所では、水分を蓄えて適度な湿度が保たれるため、長生きするから。

問七 ──線部⑤「この助け合い」とありますが、ブナ林に見られる助け合いの仕組みを、人間社会に置きかえて何にたとえていますか。本文から八字で探し、書きぬきなさい。（　、　。「　」は字数に数えます。）

問八 ──線部⑥「想像もできなかったことだ」とありますが、どのようなことが想像できなかったのですか。本文のことばを使って三十字以内で答えなさい。（　、　。「　」は字数に数えます。）

問九 ──線部⑦「自分がしたこと」とありますが、それはどのようなことですか。次の文の（　Ⅰ　）・（　Ⅱ　）にあてはまることばをそれぞれ指定した字数以内で考えて答えなさい。（　、　。「　」は字数に数えます。）

> 木と木の間の（　Ⅰ　十字以内　）ために、（　Ⅱ　二十字以内　）こと。

問十 筆者が言いたいこととしてあてはまるものを次の**ア～オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 林業に関わる人々にとって、伐採するという行為は木々への愛情表現となっているということ。
イ 無条件で助け合う森を見習い、人間社会においても弱いものを助けることが大切であるということ。
ウ 森林の生態系は、生命力の強い木が樹冠で弱い木を懸命（けんめい）に守ることで成り立っているということ。
エ ブナ林では間隔を均等にすることで、より生長できて他の木を助け合うことができるということ。
オ 人と森の社会は共存しており、互いに援助することでそれぞれの社会が活性化されるということ。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学四年生の真鍋優生は嫌なことがあって以来、家以外のトイレに一人で行けず、一年間学校にも通えていない。そんな中、母の千佳は優生たちを連れて、祖父の清次の住む瀬戸内海の島を訪れることになった。次の場面は、皆で山に登りながら、嵐の日に海に落ちて亡くなった竜生のことを語っている場面である。

〈優生から見た人物関係〉

曾祖父（清次）　――　《故人》祖父（竜生）　――　父（毅）

母（千佳）　――　優生

妹（茉由）

「茉由のお父さんはその時なにをしてたの？　海に落ちた自分のお父さんを助けてあげなかったの？」
どこまで話を理解しているのか、茉由が険しい表情で清次を問い詰める。
「毅はその時まだ八歳だったんじゃ。優生よりこんまかった（小さかった）んじゃ。なにもできんわ」
清次は十五分ほどの休息を終えると、また石段を上がり始める。体が軽いからか、茉由は意外にも弱音を吐かずにひょいひょいとその後をついていく。体力が衰えているはずの優生も、千佳のように〈①〉で息をするようなことはない。
「でもな、その嵐の日を境に、優生と茉由のとっちゃんは、いまから行く大天狗神社にお詣りをするようになったんじゃ」
学校からの帰り道、ランドセルを背負ったままで石段を上がっていく毅の姿がその日から毎日見られるようになった。漁から戻ってくる船上からも、黒いランドセルが太陽の光を集めながら山を上っていく様が見えた。
「うら（私）は、毅が天狗様に『とっちゃんを探してくれ』と頼みに行っとると思ってたんじゃ。海に落ちたまま、うらの総領は還ってこんかったからのう」
「違ったの？」
優生がぽつりと問いかける。
優生が自分から言葉を発したことが嬉しかったのか、清次は口をすぼめて間を取ると、
②「ああ、違ったんじゃ」
ひくりと眉毛を動かす。
「雨の日も雷の日も、猪が出てもお詣りをやめなかった毅に、うらは訊いたんじゃ。『わい（おまえ）は天狗様になにを探してもろうてるんじゃ？　とっちゃんの亡骸か』と」
「それで、茉由のお父さんはなんて答えたの？」
「強い心じゃ、と言いよった。なににも負けん強い心を探してもらっとるんじゃと、毅はうらに言ってきよった。島一番のおとっちゃまがと、うらはその時、総領が死んでから初めて愉快な気分になったんじゃ」
③優生が足を止め、空に続く石段を仰いだ。雨の一滴を待つような顔をしている。
「毅が強くなっていく姿を、うらはこの目で見てたんじゃ。強くなりたいと願った時に、人はもう強うなってるもんじゃ。うらはそのことを、毅に教えてもろうたわ」
海と同じ、薄緑色の鳥居が目の前に現れた時はもう、海に浮かぶ島々が目線のはるか下にあった。海沿いに並ぶ民家の黒や青の屋根瓦が淡い光を帯び、島の紋のごとく煌めいている。
「さあ、あと少しじゃ。優生、茉由、頑張れ。千佳さんもあとひと息じゃ」
薄緑色の鳥居をくぐり抜け、最後の石段を上りきった先に小さな祠が見えてきた。
「あれが天狗様よ」
祠のすぐ左横、清次が指差す先に注連縄が張られた石垣があり、その岩肌の中に石でかたどられた天狗の顔が浮かんでいる。まるで隠し絵のような石像は、自然の岩に完全に溶け込んでいて、言われなければ見落としてしまいそうだった。
「岩の中に……天狗がいる！」
④優生が虚をつかれたようにその場で棒立ちになる。
「さあ優生、天狗様にわいの探しものを出してもらえ」
柏手を打つ清次が、石造りの天狗像に向かって背筋を伸ばす。茉由は清次にならって手を合わせ、頭を垂れていた。
（お母さん、私、この前落とした自転車の鍵、探してもらうね）
茉由が耳元で囁くのに唇だけで笑ってみせ、そのまま薄目を開けて優生の横顔を盗み見る。⑤優生は手を合わせることなく、岩の中に埋まっている天狗の像を食い入るように見つめていた。
「上ってきてよかったじゃろう」
下りの坂道は、踏み外さないよう一歩ずつ慎重に足を出した。上りとは違い、眼下の景色を眺めながらなのでそれほど辛くはない。
帰り道も足休めの踊り場ごとに、清次が休息を取り昔話を語り出す。
「九十五まで生きとると、ええことも悪いこともたくさんあったわ」
連なる屋根瓦の合間から見えていた小さな海が、足を一段踏み出すごとに大きく広がっていく。
「勝つこともあった。負けることもあった」
石段の両側は冬枯れの笹林で覆われていたが、ところどころに野生の南天が生え、その鮮やかな赤色が目を引いた。
「時には逃げることもあった人生じゃ」

誰に向かって言葉をかけているのか、あるいは誰にも向けられていないのか、清次の言葉は白い空に吸い込まれていく。言葉だけではなく清次自身が空に溶けていきそうで、茉由もそれを感じたのか「清じいちゃんっ」と清次の手を取る。風船を繋ぎ止める細い紐を、ぎゅっと握りしめるみたいに。

「ただな総領。逃げてもいいが、逃げ続けることはできないんじゃ。自分の人生から逃げ続けることなど、できないんじゃよ」

⑥同じ言葉を二度繰り返し、清次が優生の頭を優しくつかむ。

「うらの九十五年は、ええ人生じゃった。最後の最後にこんな可愛いひ孫らに会わせてもらえるなんてのう。嬉しいのう、*百合子。嬉しいのう、毅。嬉しいのう、海の中におる、うらの総領よう」

⑦緩やかに波打つ海が、気がつけばすぐ目の前にあった。湿気を孕んだ潮風が全身を通り抜けていく。

「どうした総領、なにをもじもじしとるんじゃ。……小便か？」

優生の太腿に力が入り、両膝が小刻みに震えている。

「こっち来い、立ち小便じゃ」

猪が出るかもしれんけん、もし出たら目を合わすな。清次が優生の腕を取り、藪の中に連れていく。カサカサと枯れた笹をかき分け藪の中に隠れる二人の姿は、あっという間に見えなくなった。

しばらくすると、山鳥の鳴き声に混ざって勢いのある水音が聞こえてきた。ほとばしる水流が枯葉を打ち、四方八方に飛び散る音だ。そのためらいのない自由な音に胸が引き絞られ、千佳は自分の胸を右手で強く押さえる。兄の事情を知っている茉由が嬉しそうに千佳を見上げるのを、百合子さんが不思議そうに眺めていた。

「明日になったら*長崎港の墓に連れていくけん。*詣り墓に、うらの総領が眠ってるんじゃ。骨は埋まっとらんが魂が遺っとる。わいらのじいちゃんに挨拶してやってくれ」

大天狗神社の参道を下りきると、清次は千佳と子供たちにそう言って手を合わせた。今日はもう遅いから明朝、瀬戸内の朝陽が降り注ぐ美しい墓を見せてやる。それから隣島にある石の博物館に行こう、そこにはきれいな石がたくさんあって、と――。

（藤岡陽子『海とジイ』）

*大天狗神社……島にある、探しものを取り戻してくださる御利益のある神社。　*総領……ここでは長男の意味。
*おとっちゃま……島では弱虫のことを言う。毅は小さいころ、周りの大人からずっと「おとっちゃま」と呼ばれていた。
*百合子……優生の叔母。清次と島で暮らしている。　*長崎港……大天狗神社のある、島の北側に位置する港。　*詣り墓……死んだ人の魂を埋葬する墓のこと。

問一　〰〰線部の（　①　）にあてはまる体の一部を表すことばをひらがな二字で答えなさい。

問二　――線部②「ああ、違ったんじゃ」とありますが、これを説明した次の文の（　Ⅰ　）・（　Ⅱ　）にあてはまることばを本文のことばを使って考え、それぞれ二十字以内で答えなさい。（　、　。　「　」は字数に数えます。）

清次は、毅が天狗様の力を借りて（　　Ⅰ　　）と思っていたが、本当は（　　Ⅱ　　）と知ったということ。

問三　――線部③「優生が足を止め、空に続く石段を仰いだ」とありますが、このときの優生の様子を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　清次の言葉で、今の自分が成長するために何もできていなかったことに気づいて考えこんでいる様子。
イ　石段を前に自分の将来が不安で足がすくみ、これからどうするのがよいのか思いをめぐらせている様子。
ウ　清次の言葉を心に受け止め、石段を登りきることで自分も強くなれるのではないかと思案している様子。
エ　まだまだ続く石段を見て、自分が乗り越えないといけない道のりの長さに足を踏み出せないでいる様子。

問四　――線部④「優生が虚をつかれたようにその場で棒立ちになる」とありますが、このときの優生の様子として考えられるものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　岩とまるで同化しているような天狗の姿に驚いて身動きできなくなっている様子。
イ　今にも動き出しそうでリアルな天狗の姿がこわくて動けなくなっている様子。
ウ　すぐには気づかないほど小さく作られた天狗の姿が意外であっけにとられている様子。
エ　思ってもみない場所にいる天狗の姿に出しぬかれて立ちつくしている様子。

問五　――線部⑤「優生は手を合わせることなく、岩の中に埋まっている天狗の像を食い入るように見つめていた」とありますが、このときの優生の気持ちとして考えられるものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　父の願いを叶えなかった天狗に対して、真剣に祈ったところで仕方がないと疑いの目を向けている。
イ　父が来る日も来る日もお祈りを欠かさなかったと聞き、自分にはできないことだとあきらめている。
ウ　自分の気持ちに真剣に向き合うことで、叶えてもらいたい願いを天狗に届けようとしている。
エ　父の願いの内容を知り、自分が手に入れなければならないものが何かつかめそうな気になっている。

問六　――線部⑥「同じ言葉を二度繰り返し、清次が優生の頭を優しくつかむ」とありますが、このときの清次の様子について説明した次の文の（　Ⅰ　二字　）・（　Ⅱ　十二字　）にあてはまることばを、それぞれ指定した字数で本文から探し、書きぬきなさい。（　、　。　「　」は字数に数えます。）

清次は、自分の（Ⅰ　二字　）が悪いことばかりではなかったと振り返り、生きているうちに優生が一歩踏み出すきっかけを作ってあげようと、（Ⅱ　十二字　）ということを優しく諭している。

問七　――線部⑦「緩やかに波打つ海が、気がつけばすぐ目の前にあった。湿気を孕んだ潮風が全身を通り抜けていく」とありますが、千佳はどんなことを感じとっていますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　海に竜生の存在を感じ取って、優生が穏やかな気持ちになり、誰にでも優しく接していけるようになるということ。
イ　海に竜生の存在を感じ取って、優生と千佳の清次や島に対する親近感が、一度にふくれ上がってくるということ。
ウ　海に竜生の存在を感じ取って、優生の体に活力がみなぎり、どんな運命にも立ち向かおうとしているということ。
エ　海に竜生の存在を感じ取って、優生の心が徐々に変化し、未来が今まさに切り拓かれようとしているということ。

問八　――線部⑧の「隣島にある石の博物館」は、現在、竜生の友人であった栄一が営んでいる。次の文章は栄一が竜生の葬儀でのことを孫の澪二に語っている場面である。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「息子の名前は毅と言ってな」
祖父が再び話し出すのを澪二は黙って見守っていた。どうしてか祖父とこんなふうに話をするのは、今日が最後のような気がしていた。
「真鍋の葬式の日、毅は空っぽの棺の前でじっと正座をしていたよ。涙も流さずな。だが気がつくと姿がなくて、わしは慌てて外に探しに行ったんだ。そしたら毅は、桟橋の上に立っていた。桟橋の先端で、海を見ていた。『ここでなにしてる』と訊くと、『とっちゃんと話しとる』と返ってきた。あまりに早く逝ったもんで、とっちゃんにありがとうを言えなかったから、とな」
おじさんもだ、おじさんもきみのお父さんにありがとうを言いそびれた、おじさんには十分な時間があったのに、それなのにたった一度もお礼を言えなかったんだ――。隣に立つ毅があまりにか細く頼りなくて、こんな小さな子供を置いてあいつは逝ったのかと思うと悲しくて、祖父はそんな言葉を口にしながら泣き崩れてしまったと話す。それまでずっと耐えていたのに、八歳の子供の前で、涙が止まらなかった。
「おじさん、うらのとっちゃんは海におるよ」
海の前にむせび泣く祖父に、毅は手に持っていた石をひとつ、手渡してくれた。
「こうしてとっちゃんと話すんじゃ」
言いながら、毅が自分の手にあった石を海に落とした。石はゆらゆらと揺れながらも真っすぐに海の底へ沈んでいく。自分も同じように石を落とし、「真鍋、ありがとうな」と両手を合わせ、感謝の言葉を海に手向けた。
それから祖父は毅と二人で海を眺めていたのだという。先の台風が幻だったかのように天気のいい日で、波の間から金色の光が弾けていた。風が吹くと波の形が変わり、光も揺れた。

(1)　――線部「祖父はそんな言葉を口にしながら泣き崩れてしまった」とありますが、この時の栄一の様子を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　今ごろになってやっと竜生に「ありがとう」が言えたことを澪二に話し、涙が止まらなくなっている様子。
イ　けなげに父親に感謝を伝えようとする毅が幼くして残されたことを思い、涙が止まらなくなっている様子。
ウ　小さな毅を置いて旅立ってしまった竜生への怒りの気持ちを毅に話し、涙が止まらなくなっている様子。
エ　たった八歳の幼い毅が決して泣かずに気丈にふるまっていることを思い、涙が止まらなくなっている様子。

(2)　この文章を読んだあと、A～Cさんが本文全体について語りました。Ⅰ は六字、Ⅱ は一字であてはまることばを本文全体から探して書きぬきなさい。（ただし、同じ記号には同じことばが入ります。）

Aさん　毅はお父さんを事故で亡くしてしまったけれど、石を落としてお父さんと会話していたんだね。
Bさん　そうだね。それに、毅はその後も毎日山登りをして天狗様にお祈りしていたよね。
Cさん　清次はそんな毅の姿を見て、Ⅰ と願うことが大事なんだと気づき、優生にもそれを伝えたかったんだろうな。
Bさん　それにしても、Ⅱ って人の命を奪う恐ろしいものだと思ったけれど、こうして会話もさせてくれるんだね。
Aさん　毅や優生が、そうした会話を通して Ⅱ の大きな包容力とともに成長していく様子が描かれた作品だね。

三　次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

1　書類をフクシャする。
2　中学生をタイショウにした本。
3　参加することにイギがある。
4　ウチュウ旅行をする。
5　事故の原因がハンメイした。
6　ケッソン部分が見つかる。
7　学問をオサめる。
8　いわれのないヒナンを受ける。

二〇二四年度　中学校入学試験（A日程午前）　国語解答用紙

一

問一

1 ミキ		4 シゲン
2 ア	びて	5 カブ
3 キョウミ		6 カテイ

問二

A

B

問三

問四

C

D

問五

問六

問七

問八

問九

I

II

問十

二

問一

問二

I

II

問三

問四

問五

問六

I

II

問七

問八

(1)

(2)

I

II

三

1 フクシャ		5 ハンメイ
2 タイショウ		6 ケッソン
3 イギ		7 オサ
4 ウチュウ		8 ヒナン

める

受験番号
得点

二〇二四年度　中学校入学試験（A日程午前）　国語解答例

一

問一

1 ミキ	幹	2 ア	浴（びて）
3 キョウミ	興味	4 シゲン	資源
5 カブ	株	6 カテイ	過程

問二

A　仲間

B　局所的な気候が変わってしまうこと。

問三　ア

問四　C　情報　D　調節（調整、分配も可）

問五　イ

問六　ウ

問七　社会福祉システム

問八

樹皮をはがされても、現在まで生き続けた木があったこと。

問九

I　スペースを増やす

II　樹皮をはがしてそうとした木を枯らす

問十　イ

二

問一　かた

問二

I　海に落ちたお父さんを探してもらっている

II　何にも負けない強い心を探してもらっている

問三　ウ

問四　ア

問五　エ

問六

I　人生

II　逃げ続けることはできない

問七　エ

問八

(1)　イ

(2)

I　強くなりたい

II　海

三

1 フクシャ	複写	2 タイショウ	対象
3 イギ	意義	4 ウチュウ	宇宙
5 ハンメイ	判明	6 ケッソン	欠損
7 オサ	修（める）	8 ヒナン	非（批）難

受験番号
得点